

道心

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成15年10月15日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎ 082-229-0618 zenshoji@bronze.ocn.ne.jp



現代医療から

生・老・病・死を考える

山主 横山 正賢

数年前からこんな現象が起り始めた。七年前の話だが、長年お寺の役員を務めて下さった方が、解離性動脈瘤と診断されその手術を前にして、私に話したいことがあると言いつてがあり伺った時、医師から図に書いての手術の説明を受けた話をそのまま話されて、方丈に頼みがあると言われた「私は助からないかも知れない、医師には手術がうまくいかなくても、無駄な延命処置はせぬよう尊厳死させて欲しい旨を伝えてある、その時には宜しく頼む」と、ご自分の葬儀の段取りなど息子に託す前の相談があり、堅い握手を交わして分かれた。

その夜突然動脈瘤が破裂して集中治療室に搬入された、既に多量出血し脳死状態となっていた、家族が「本人は尊厳死を望んでいるのだが」と言う医師は任せてくれ少し見させてくれと言われ、まま六十六日後に七十一才で逝かれた。尊厳死とはどんな逝き方を言うのかを考えさせられた時である。

その後も「方丈さん、父が倒れて意識不明の危篤状態にある、医師から何時逝つてもおかしくない、身近な方には状況を知らせておくよう言われた」と知らされて数ヶ月後に逝く人、数年も人工的に生かされているという現実がある。

格別親しい関係にあった方を見舞った時のことだが、付き添う人もなく鼻からチューブを通され横臥されていた。それから既に二年は過ぎる、往年の輝いた日々を過ごされていたことを思うと、哀れと空しさがこみあげる。

私の竹馬の友に名医と言つて過言でない医師が居る。彼が言つていた「大学医学部のクラス会に参加してイヤになった、何奴も此奴も経営する病院の病室の数や従業員の数、患者を何人抱えているなどと誇らしげに自慢し合う。

医者というのは病気を治す職人でなくてはならない！如何に早く病を治し癒してやるか、専門外の病に適切なアドバイスをして専門医に送るかである、病院の規模などどうでも良い。問題は医療の中身だ」と嘆いていた。

檀家の頑固なお爺ちゃんが体調を崩して、居住地域で数十ベッドを有した個人病院に掛かつて沢山の薬を投与されていた、奥さんがあまりにも多

い薬の量に「薬の飲み過ぎではないかと」疑問に思つていた。しかし夫は「先生の勧められる薬だから」と飲み続けた、そのうち意識不明となつて寝たきりとなつた、家族の周辺では死が間近と思つていた。意識不明となつてからは医師が毎日栄養剤を点滴に出来るだけで処置のしようもなかった。ところが彼岸のお参りに伺つて驚いた「方丈さん死に損ないました！」と元氣になつておられた。奥さんの話を聞くと寝たきりになつたから薬を飲ませることをやめたら数日後に意識が戻り、起きあがれるようになったと。

また今年春檀家の娘さんの主人が食欲が無く、胃がおかしいと訴えて、近くの個人病院で診てもらつたが詳しい診察もせず「胃潰瘍でしょう」と言われて入院し十日も過ぎるが衰弱するばかりで一向に改善しないことに妻が疑問を持ち、院長に早く善処するように強く訴えた、それじゃーと公立病院を紹介されて検査の結果、即入院即手術となつたが若い命は病根も勢いが強く、にわかに不帰の人となつた。院長は「私の見立てが悪かつた」と謝つたそうだが無念である。

先述の竹馬の友、名医をホームドクターに持つていることを感謝する。

仏教では生・老・病・死を諸々の苦しみの元として四苦という。この時、生・老・病・死を別々に捉えないで生きる、生かされるということは老病死もひつくるめて受けとめなくてはなりません。

老病死を先送りして今を生きてではなく、老病死をしっかりと意識して、今日の命をどう戴いて生きるかは、食をどう戴くか、身体機能を日々機にに応じ便に依りて働かすかに有ると思つ。健康的に生きるためには転ばぬ先の杖として、良いホームドクターを持つことをお奨めする。

春の章 第6話



笑いもお布施



私たちは朝から晩まで、
お布施のなかで生きているのです。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

今春、東京の大学を卒業して、念願の有名企業に就職なさったお嬢さんから、相談のお手紙をいただきました。

毎日、パソコン文書のコピーと配布、電話番号、新聞整理、お茶くみなどの雑用ばかり。こういうことをするために苦勞して高校、大学で勉強してきたのではないと、真剣に悩んでいるのです。

ですから私は、人の生き方を花にたとえて教えられたお釈迦さまの言葉を、贈らせていただきました。

うづたかき華堆より

かずかずの華の鬘を

作りえん

かくのごとく

ここに生まれたるものの

善きことは多し(法句経)

そして「部屋に一輪の花を飾ることを忘れない人になつて下さいね」と、書き添えました。

職場の花“になりたくないあなたへ

花を見て腹を立てる人は、ほんとういないですよ。

部屋に一輪の花がある。庭やマンションの小さなベランダに一輪の花が咲いている。

それだけでホッと、嬉しくなり、明るくなるものです。地上に花がなかったら、どんなに寂しいことでしょう。

その人がそこに居るだけで、その人がお部屋に入つてこられたというだけで、花が咲いたように

部屋中が明るくなり、楽しくなる人がいます。その人と共にあるというだけで、その人の笑顔に接しているだけで苦しみも癒され、生きる勇気が湧いてくる、そんなお方もおられます。

反対に、その人の顔を見ただけで腹が立つ、イライラしてくる、そんな方もあります。暗い顔やトゲのある表情や言葉で、相手を立ちあがれないほど打ちのめしたり、芽吹きそめた若芽さえも凍え死にさせる、霜の役をつとめてしまう人もいます。

あなたの笑顔で、あなたの「お疲れさま」というねぎらいの一言で、あなたの職場の人々のすべてが今日一日の疲れを忘れ、安らぎと喜びをいただくーそんなあなたであることは、なんて素晴らしいことでしょう。

「笑う」という言葉には、「花咲く」という意味もあります。部屋に一輪の花を飾ることを忘れない人になるということは、あなたが一輪の花そのものになるということなのです。

そのお嬢さんに限らず、最近の働く女性たちは、「職場の花“はごめんだわ」と言います。

女性が結婚するまでのコシカケ的な意識が強く、したがって重要な仕事も与えられませんでした。そんなあり方に対する揶揄として「職場の花“という言葉が生まれたのでしょう。

私の言う「職場の花“はそんな薄っぺらのものではありません。家庭を飾る花、職場を飾る花、町や村や、大きく国の誇りとなる花、あなたが居るだけで周囲を明るくし、居あわせた人々に喜びや安らぎを運ぶ、そんなあり方をいうのです。

和顔施、愛語施

今から八百年ほど前の中国に廓庵禪師という方が出られ、人の修行のあり方を十段階の牛飼いにたとえて説かれました。

「十牛図」というのがそれで、よく禅画などに登場してまいります。その最後の十番目の絵は、笑顔の布袋さんが大きな袋をかつき、ハダシで子供と遊んでいる図柄です。そしてこんな言葉が添えられております。

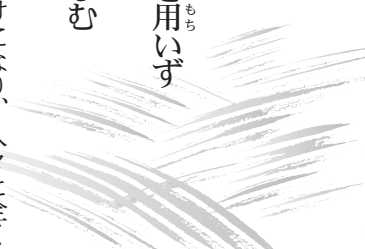
土を抹し灰を塗って

笑い顔に満つ

真仙神祕の訣を用いず

直に枯木をして

花を放つて開かしむ



——泥んこになり灰だらけになり、人々と全く同じ姿になりきり、いづどこにあっても温かい微笑みが、顔いっぱい、体いっぱいにあふれ、神通力だの靈能だのと、あやしげな手段を用いず、ただその方が共におられるというだけで、居あわせたすべての人の心に喜びの花を咲かせて歩くといふのです。

日本の昔話の『花咲かじいさん』の心はこれであつたな、と改めて思つたことです。

これも何も難しいことはありません。あなたの温かい微笑みと、思いやりのある一言でできるのです。

道元禪師は、

「ただまさにやわらかなる容顔をもて、

一切にむかうべし」

とおおせられ、お釈迦さまはこれを「和顔施、愛語施」という言葉で語っておられます。

施というのは布施のことです。お布施というと皆さんはお坊さんにお経を読んでもいただいた時、または托鉢などの御供養させていただくことをいふと思つておられる方が一般でしょう。

でも、ちよつと違います。布施は大きく分けて物を施す財施と、教えや真心を施す法施の二種類あります。和顔施は微笑を布施する、愛語施は愛の言葉、慈しみの言葉を布施すること、法施の中に入ります。

道元禪師は、さらに、

「一切のものが、布施の功德をもともと備えてゐる」

とも、おつしやいました。

具体的なたとえを持つて考えてみましょう。

朝から晩まで、お布施の中で生きている

私は今、電気の照明のもと眼鏡をかけ、机の上のせられた原稿用紙にペンを走らせております。電気は明るさというお布施を、眼鏡はすべてを大きくはつきり見せてくれるというお布施をしております。

外はしのつく雨、屋根や建具や畳や座布団が、私を湿気から守るという布施をしてくれおります。弟子が、

「ひと息おいれになつてはいかがですか？」

と、初もののさくらんぼを美しいガラスの器に盛つて運んできてくれました。この優しい心根も布施です。

さくらんぼはその体ごと供養、つまり捨身（わが身を捨てての）供養をしてくれております。つまり、そのものがそのものとしての役をつとめあげた時、布施することができたといえるのであり、私たちは朝から晩まで布施のただなかに生かされていることを忘れたくないと思ひます。

そして、人の社会にあつても、政治家はおのれを捨てて人々の真の幸せのための政治に命をかけ、医者（は）は医者の使命に、教育者は教育に、父は父の座に、母は母としての使命に命をかける時、ほんとうの布施ができたと言えるのです。一つ間違ふと奪い合いの悲しく貧しい人生となり、一つ切り換えると、布施のしあいのあたたかく豊かな人生となります。

お地藏さまをお参りする時の御真言は、

「オン カカ カビサンマイイ ソワカ」

であることはご存知ですか。「カカ」は「呵呵大笑」の「呵呵」で、「ハッハッ」という笑い声を表し、「カビサンマイイ」は「莞爾」と訳し、微笑を表します。

日本で昔から呼び親しまれている「カカサマ」「ハハサマ」という母への呼び名も、この笑い声、カカ、ハハから来ているのだそうです。

そして言うまでもなく、これは女性に限ったことではありません。

すべての人のありようを花にたとえ、その花とは常に今ここにあつて微笑みをたやさないことなのだということを、幾重にも心に銘記した毎日でありたいと思つたことです。

※ 本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より
抜粋したものです。

サンフランシスコ(シスコ)と 禅センター参拝の雑感

安佐南区 中山 俊郎



この度の旅行に夫婦揃って参加させて頂いたことは、大変有り難く感謝しています。引率頂いた方丈様、団長を務めて頂いた斉藤様、旅先の現地で色々お世話を頂いた副住職の泰賢様ご夫妻、そして行動を共にして頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

二十七年前、アメリカのシカゴを中心にイリノイ州、アイオワ州周辺の穀倉地帯を視察、又カリフォルニア州の酪農地帯を視察する為、サンフランシスコから大型バスでフレズノで一泊しロサンゼルスまで移動したことを思い出した。

家内は初めての外国旅行、もちろん飛行機も初めての経験。どんな気持ちだったのか夫婦でもわかりません。私も久しぶりにジャンボ機に乗ることが出来た。

シスコは二度目という気持ち

で特に不安は感じなかった。しかし市内観光は初めて。人口七十八万人、多くの丘から出来ている坂の多い町、夏でも暑くならない霧のシスコなど、ガイドの説明で少しはシスコの事が頭に入った。シスコと言えば金門橋、ゴールデンゲートブリッジである。前回は橋の下にある公園から見上げただけ、この度は橋を渡ることが出来た。対岸の山の上から橋を一望する事も出来た。笑われると思うが感動した。

市内の禅センターとアメリカのお寺桑港寺に参拝。桑港寺では日本人の若い住職さん始め檀家の皆さんに出迎えて頂き、参拝後お茶の接待をうけ、ホッとした一時を過ごした。又お寺の地階にある国際センターの一室も案内頂いた。アメリカにはこの桑港寺とロスアンゼルスにある禅室寺の二つのお寺と大小二百近い禅センターがあるとの事を聞き、国際センターにおける泰賢さんのお仕事は、宗門にとっても大切なそして大変なお仕事であることも、少しは理解できた様な気がします。市

内にある禅センター、郊外にあるグリーンガルチファーム、オークランドにある好人庵、三ヶ所の禅センターを参拝させて頂いた。

それぞれ特徴のある禅センターであった。なかでも好人庵の住職さんは日本の方で北アメリカの総監を務めておられ、泰賢さんの上司に当たる秋葉総監様。

ご挨拶のなかで泰賢さんのお仕事についてお話があり、国際センターではまだ必要な人であるとの事、それに対して方丈様のご挨拶もありました。色々考えさせられた場面でした。

私も禅昌寺の檀家として何をすべきなのか、何が出来るのか真剣に考えなければと感じた一時でした。

カリフォルニアワインの産地ナパ・バレー、ヨセミテ国立公園の巨岩郡とマリボサ・グローブ(巨木の森)、ラスベガス、グランドキャニオン、いずれも有名な観光地、貴重な体験をさせて頂きました。

以上雑感といたします。

秋の慕情 (旅の空にN先生を偲ぶ)

Syouzi.K

N先生にお会いしたのは、20年ぶりである。北の国には木枯らしが吹き抜ける、肌寒い日であった。T駅の入りに付近に立つておられ笑顔で迎えられた、初老の御婦人がN先生であることは直ぐ分かった。古稀を迎えられたとは思えぬ若さが感じられ、美しい容姿は40数年前教壇に立つておられた頃と少しも変りないものであった。

N先生に是非お会いしたい、そう意識したのは石川達三の「人間の壁」を読んだ時であった。書籍棚にある人間の壁が目につき表紙裏の概要を見入った時、学童の学習環境の向上と民主教育の定着をめざす女性教師を主人公にした物語に引き寄せられた。これが、その動機となった。

物語は昭和32年の春。九州の片田舎の町で5年生を受け持った尾崎先生は、愛情の全てを学童に注ぎ続ける教育者であった。それは、戦後の民主教育を定着させる苦闘の連続でもあった。昭和32年、この数字がえらく気になった。考えてみると、この年は私が小学6年生に進級した年で同世代の世界である。私の小学時代が鮮やかに蘇ってきた。確かその時お

世話になった担任は、N先生である。更に読み進むと、尾崎先生とN先生が重なり合ってきた。読み進めば読み進むほど、無性にN先生にお会いしたくなった。

結婚されたまもなくは、私の生まれ故郷に住んでおられた。しかし、今はどうしておられるか知るすべはなかった。図書館に向くや、すぐさま電話帳を取り出した。K市にはそれらしき人が見当たらない。どうしたものか、これといった聞き尋ねる知人もいない。その時、脳裏をかすめたのがN先生の実家であった。K郡Y町にN姓が一軒記載されていた。これだと思った。失礼を省みず電話すると、『私の姉です』との返事を受けたのである。

N先生は、びっくりしておられた。しかし、快い返事をいただきお会いする機会を得たわけである。小学校6年間の在学中には5名の先生にお世話になっている。それなのに何故N先生に強い印象が、残っているのであらうか。40数年たった今も、N先生に対する思慕が募るのは何故なのであろうか。それは、N先生の熱い情愛に満ちた教育姿勢にあったと思われる。

N先生は私達より一回り年長で、23歳の時私達を受け持たれたことになる。新鋭で若々しい中にも質素で、清楚感にあふれた先生であった。それは美しい姉のような親しみやすさがあり、母親の愛に欠如した学童には母のような存在でもあった。凛として穏やかに、やさしく話しかけられるN先生の話し言葉は情熱的で、慈悲に満ち溢れたものだった。

N先生は、決して授業の進度を早めようとはされなかった。むしろ、遅れぎみであった。それは、落伍者は決して生じさせない。そうした強い意志に基づいた物のように思われた。学力に優れた者には方向性を与え、学ぶ環境さえ整えれば自ずと育っていく。しかし、遅れた学童にはいくらでも時間をかけ、しっかりと基礎力を理解させる。そうすれば必ず学業にも順応し、自分に適った学習方法を見出し、満足した学園生活が送れる。これが初等教育の持つ役割だ。N先生は、教育に対する情熱的な哲学を持つておられたように思えるのである。

授業の中から、ふんだんに遊び心を教えられたのがN先生であった。国語の授業や社会科の授業が脱線すると、いつのまにか演劇の場に変るのはしつちゅうの事であった。ワイワイ・ガヤガヤ教室中は大騒ぎとなつても、N先生は後ろの机の方でにこやかに優しい眼差しで楽しそうに見守っておられた。土曜日の放課後になると、わるい餓鬼共が『先生、裏山へ登ろうー』と声をかけると喜んで学童の輪の中に入り、遊びに興じておられた。

自然に親しみ、自然の中で育っていく。学業以外に情操教育の重要性を、知得しておられたのである。

先生の業務は多忙である。N先生は教室での授業以外の業務も、決して疎かにされる方ではなかった。学童が一日の勉学に疲れ家路に着くころ、1人教室の机に向かわれるのが常であった。帰途に着かれるのは、東の空に星が一つ又一つとその輝きを増しはじめる頃であった。

N先生と親しく話していると、あつという間に2時間ちかく経っていた。N先生と話していると楽しかった。N先生の話され方が簡潔で、言葉短でうまく相手の話題を促す話し方をされたからである。一言一言に重みがあり、話題性に富んだ話であった。懐古的な話題から家庭教育、更には人生論までおよび話しは尽きるところがなかった。私が夜間大学院へ入学し修士学位を取得した話しをする、是非、Doccorへね」と進められた。N先生にはT駅まで見送って頂いた。別れぎわ「必ずDoccorをね」と言われ、私は「考えます」と力強く応えた。

Doccorは、私の高い山である。ロマンと可能性をちりばめた山であり、登りたい山である。それには財力、知力、体力更には継続力が要求される山である。思いの強さだけで克服できる山ではない。全総力をかけても、容易に登れる山でもない。しかし、登りたい山である。私はさわやかな思いで、N先生への感謝の思いを募らせつつT市をあとにした。

◆道心・趣味の会◆

短歌

● コーヒーをともに飲むと

沸ける間を

写真の夫へのわがモノログ

*モノログ＝相手なしのセリフ

● ほろにがき秋刀魚を食べれば谷崎の

「知人の愛」の秋刀魚よあわれ

東区 矢野淑子

俳句

● 初時雨 お借り申さむ 葉師堂

● 青北風や 藻屑漂ふ 船溜

東区 河野貞女

● 紅白の 曼珠沙華咲く 女坂

● 稲を刈る 棚田に入陽 映ゆるまで

東区 青笹 俊枝

● かくれんぼ 其のまま帰る 秋の暮れ

● 賑わいは 無人の駅の 彼岸花

安佐北区 岡村 竹畔

◆行事報告◆(七月～十月)

● 七月二十七日に行われましたお盆前
諸堂掃除では五十三名の方が参加さ
れました。

ご奉仕有難うございました。

● 八月六日の盂蘭盆会法要では百七十
名余りの方が参拝くださいました。

● 九月三十日の青山俊董尼老師講演会
では六十一名が参加。

◆行事案内◆(十一月～正月)

■毎年定例行事

● 臘八摂心坐禅会

十二月一日～八日(朝まで)

午前六時より一炷・午後七時より
二炷

(年内の坐禅会は八日の摂心終了を
もってお休みします。)

● 新春坐禅会

平成十六年元旦 午前八時より

● 新年のご祈禱法要

平成十六年元旦 午前十時より

檀信徒皆様の一年のご無事を祈願
する法要です。お参りされた方に
お札を差し上げます。(古いお札
をご持参下さい。)

※お寺の寺務は正月五日より通常に
戻ります。

■恒例行事

● 年末大掃除のご案内

十二月十四日(日曜日)

午後一時から三時位まで 終了後
茶話会。

一年の力を落すつもりでご家族
と一緒に参加ください。

Tsukimi in 寺い報告

松笠山の会 道管通博

十月十一日、十六夜(いざよい)の
夕べ、「道心会」および「松笠山の会」
の共催で、第三回「Tsukimi in 寺」コ
ンサートを開催いたしました。ご来場
者は三百七十余名、昨年、一昨年に
も増して、境内溢れんばかりの大盛況
のうちに終了いたしました。



当演奏会は、毎回、エリザベト音大
の大代先生のフルートを中心として、
他の楽器とのジョイントで行っていま
すが、今回はマンドリンおよび胡弓
(二胡)との共演でした。マンドリン、
胡弓の繊細で心に沁みる響きは、虫の
音や山寺の秋の夜の風情とマッチし
て、聴衆の心を大いに魅了いたしまし
た。演奏者の呼吸を感じる距離での鑑
賞は、ホールでは味わえない感動を与
えるものです。
また、いつもながらの大代先生の洒

脱なトークは、時折会場に笑いを巻き
起こし、くつろぎのうちに名曲を鑑賞
することが出来ました。

チラシの作成、会場設営、音響・照
明、駐車整理、会場案内等々、運営は
すべて「松笠山の会」のメンバーを中
心に手作りで行っております。前年の
反省をもとに毎回工夫を凝らし、年々
磨きがかかってまいります(自賛)。

「松笠山の会」というのは、お寺の
裏山で遊ぶ仲間が、平素の不徳の罪滅
ぼしに、山の清掃や登山道の草刈・補
修等を行っている集団(NPO法人)
です。それぞれが、それぞれの思いで
参加して、勝手気ままに行動している
のに、なんとなく結果がまとまってく
るという妙な人間集団です。

来年の演奏会は、十月二十三日に開
催する予定です。ご期待ください。

四国八十八ヶ所ご巡拝の旅

● 日時 十一月十五日(土) から十六日
(日) まで(泊二日)

※募集は終了しましたがまだ若干名
余裕がございます。ご希望の方は
お寺までお知らせください。

電話〇八二二九〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構です。
お寄せ下さい。次号原稿締切は、
十二月末日までお願いします。